

久留米城下町遺跡

—第23次発掘調査報告—



平成25（2013）年12月

久留米市教育委員会

序

久留米市は、広大な筑紫平野を形成した筑後川の中流域に位置し、耳納連山の緑、筑後川の水など豊かな自然に恵まれています。その環境のもと、古来より人々は多くの文化を創造し、その証である貴重な文化遺産が、市内には数多く残されています。

今回調査を実施した久留米城下町遺跡は、元和7（1621）年に有馬豊氏が丹波福知山より久留米に入城し、久留米城の整備に伴い造営を開始したもので、現在の久留米市街地の形成に繋がるものです。今回は、久留米城下町遺跡の東端付近の通町十丁目を調査し、町屋の様子を垣間見る多くの成果を得ることができました。今回の発掘調査によって、久留米の歴史の解明や文化財保護思想の理解と普及に多少なりとも貢献できれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして、多大なご理解のもとにご協力を頂きました、 氏や関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成 25 年 12 月 27 日

久留米市教育委員会
教育長 堤 正 則

例 言

1. 本書は共同住宅建設に先立ち、 氏の委託を受けて実施した、久留米城下町遺跡第 23 次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が調査主体となり、市民文化部文化財保護課の神保公久が担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、神保・田中樹子・檜原初美・藤木幸子・渡辺しげ子が行った。
また本書に掲載した遺物実測、図面の浄書は、神保と非常勤職員の米澤美詠子が行った。
4. 遺構写真は神保が撮影した。また、遺物写真撮影は、久留米市埋蔵文化財センターにおいて塚本映子、小川原励が行った。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 遺構実測図は国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を基に作成し、図面の方位は全て座標北を示す。
6. 本書に使用した遺構の略記号は、SE－井戸、SK－土坑、SP－ピット、SX－カマド、焼成遺構、不明遺構を示す。
7. 本調査に関わる遺物・記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
8. 本調査の略記号は LKM－023、調査番号は 201301 である。
9. 表紙写真は、左上－SX1 全景（西から）、中央－調査区全景（北から）、右下－SX5 全景（西から）である。
10. 本書の執筆は神保・米澤が行い、編集は神保が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 久留米城下町遺跡の立地と環境	2
III. 調査の記録	3
IV. 総括	16

I. はじめに

1. 調査に至る経過

本調査は、共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成 25 年 1 月 15 日、[REDACTED]氏から、久留米市通町 350-2 外における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地一帯は周知の遺跡である久留米城下町遺跡に含まれており、平成 9 年度には東側隣接地において第 12 次調査が、西側隣接地では国道 3 号拡幅に伴い第 15 次調査が、南東側では平成 24 年度に第 22 次調査が実施されている。いずれの調査においても古代を含む近世～近現代の遺構が多数検出されており、照会地にも遺構の存在が予想された。以上のような経過から協議を進めた結果、平成 25 年 3 月 7 日に試掘調査を実施、遺構が確認されたことを受けて発掘調査が必要である旨を回答した。その場での協議の結果、調査費用を原因者負担として発掘調査を実施する運びとなり、3 月 7 日に「発掘調査の依頼」が提出されたのを受け、文化財保護法による諸手続きを済ませた後、平成 25 年 4 月 2 日に[REDACTED]氏と久留米市長檜原利則は「久留米城下町遺跡第 23 次調査埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を取り交わした。現地の調査は平成 25 年 4 月 3 日から同年 4 月 24 日、報告書作成を含む委託契約期間は平成 25 年 4 月 2 日から同年 12 月 27 日である。

2. 調査の体制

調査委託：[REDACTED]

調査主体：久留米市教育委員会

調査総括：市民文化部

文化財保護課

教 育 長：堤 正則

部 長：野田秀樹

課 長：園井正隆

課長補佐兼課主査：宮崎俊一 白木 守

事務主査：塚本映子

庶務担当：豊福早苗

調査担当：神保公久

担当次長：佐藤光義

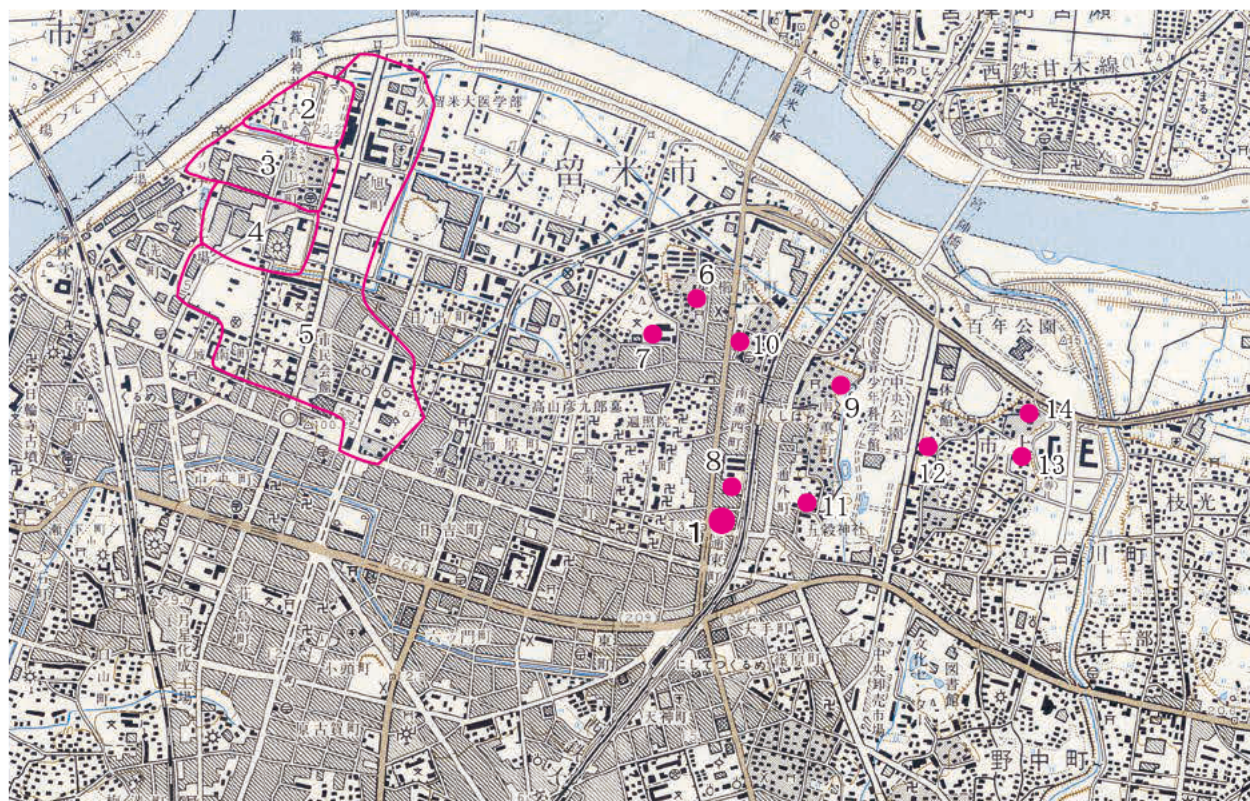
整理担当：米澤美詠子

発掘調査整理臨時職員：豊福浩子

Ⅱ. 久留米城下町遺跡の立地と環境

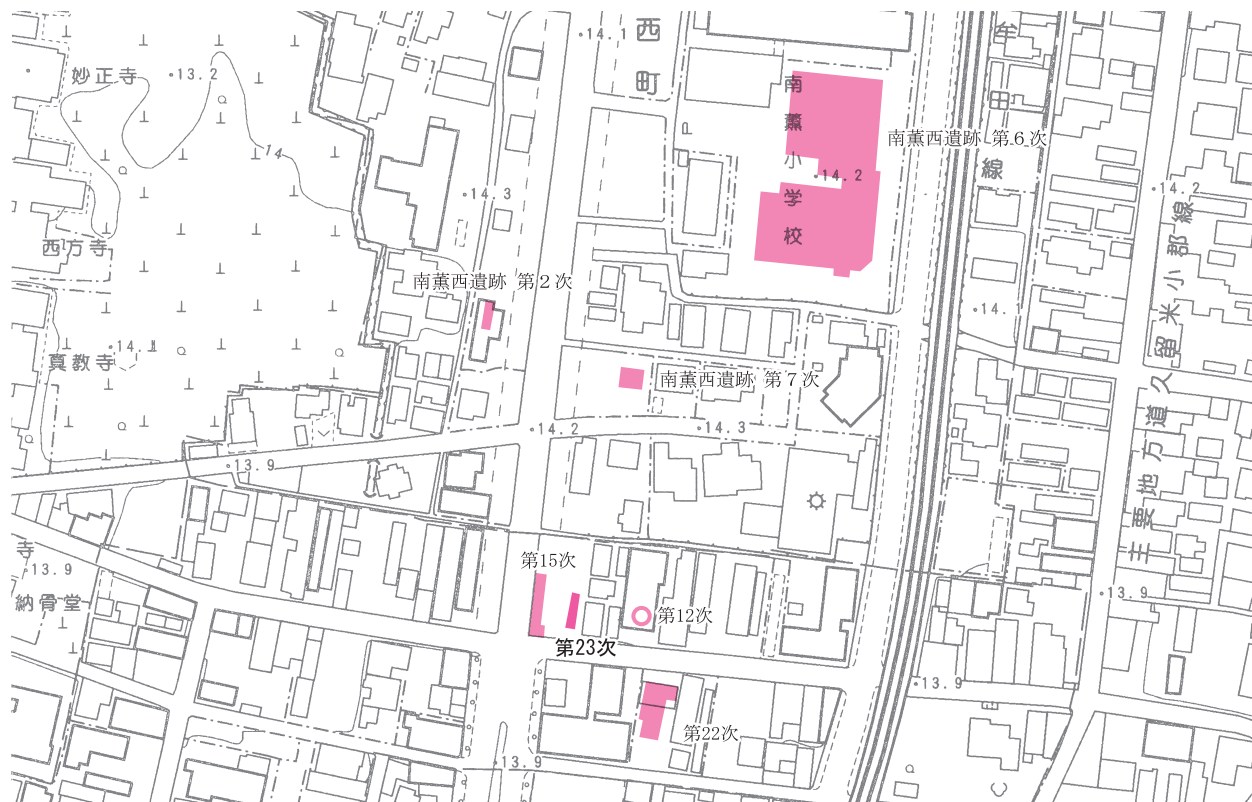
久留米市は、九州最大の河川である筑後川によって形成された筑紫平野のほぼ中央部分に位置する。市街地東方には耳納連山が位置し、その西端に延喜式内社である高良大社が鎮座する高良山（312.3m）が聳える。

久留米城は久留米市街地の北西部に位置し、その本丸は筑後川左岸の標高 10 ～ 13m を測る低台地上に立地する。元和 6（1620）年に田中家が改易された後の江戸期の久留米城は、本丸・二ノ丸・三ノ丸を南北に連ね、その東～南側を外郭が取り巻くように形成された連郭式城郭で、元和 7（1621）年に丹波福知山より移封された有馬豊氏によって築造が開始された。久留米城と侍屋敷、そして城下町の形成には相当な時間を費やしており、侍屋敷の完成を見たのは延宝 2（1674）年、本調査地の所在する通町十丁目まで城下町が延伸されたのは正保 3（1646）年のことであるという。また、久留米城と侍屋敷、城下町の各所において、これまで多くの発掘調査が実施されている。久留米城関連の景観は、現在では戦災や大規模工場などの進出によって、その多くが失われているが、発掘調査では、市街地の地下に眠る久留米城関連遺構・遺物を多く検出し、往時の景観復元に多くの情報を提供している。



第 1 図 久留米城下町遺跡第23次調査地の位置と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

1. 久留米城下町遺跡第23次調査地 2. 久留米城本丸跡 3. 久留米城二ノ丸跡 4. 久留米城三ノ丸跡
5. 久留米城外郭遺跡 6. 石丸遺跡 7. 東櫛原今寺遺跡 8. 南薫西遺跡 9. 南薫稲荷遺跡
10. 辻遺跡 11. 南薫小村遺跡 12. 西屋敷遺跡 13. 市ノ上東屋敷遺跡 14. 市ノ上北屋敷遺跡



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2, 500)

Ⅲ. 調査の記録

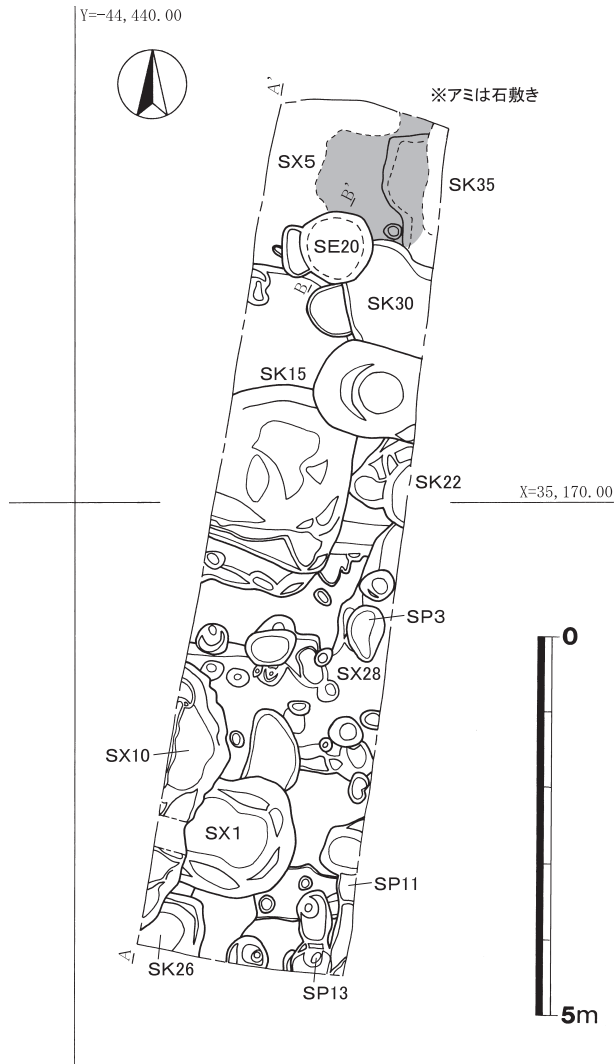
1. 調査の経過

久留米城下町遺跡第23次調査は、久留米市通町350-2外において実施した共同住宅建設に先立つ事前の発掘調査である。今回は遺構の保存が困難な共同住宅建設予定地部分を対象に実施したが、廃土置場等の関係上、約30㎡の調査面積を確保するに止まった。

平成25年4月3日に重機により表土除去を実施した。同日の午後より作業員により遺構検出を開始。並行して平板測量による略図作成を行った。その後、遺構掘下げを実施した。個別遺構を除く遺構実測はトータルステーションを用いて行い、そのデータはCUBIC社製ソフト「遺構くんCubic」にて編集・保存している。全景写真は4月16日に撮影。4月24日に重機により調査区を埋め戻し、現地調査を終了することができた。整理作業は6月1日から9月30日まで筑後国府跡発掘調査事務所にて実施した。



第3図 調査風景（北東より）



第4図 久留米城下町遺跡第23次調査遺構配置図 (1/100)



第5図 調査区全景（北より）



第6図 調査区より寺町を望む（南東より）

2. 検出遺構

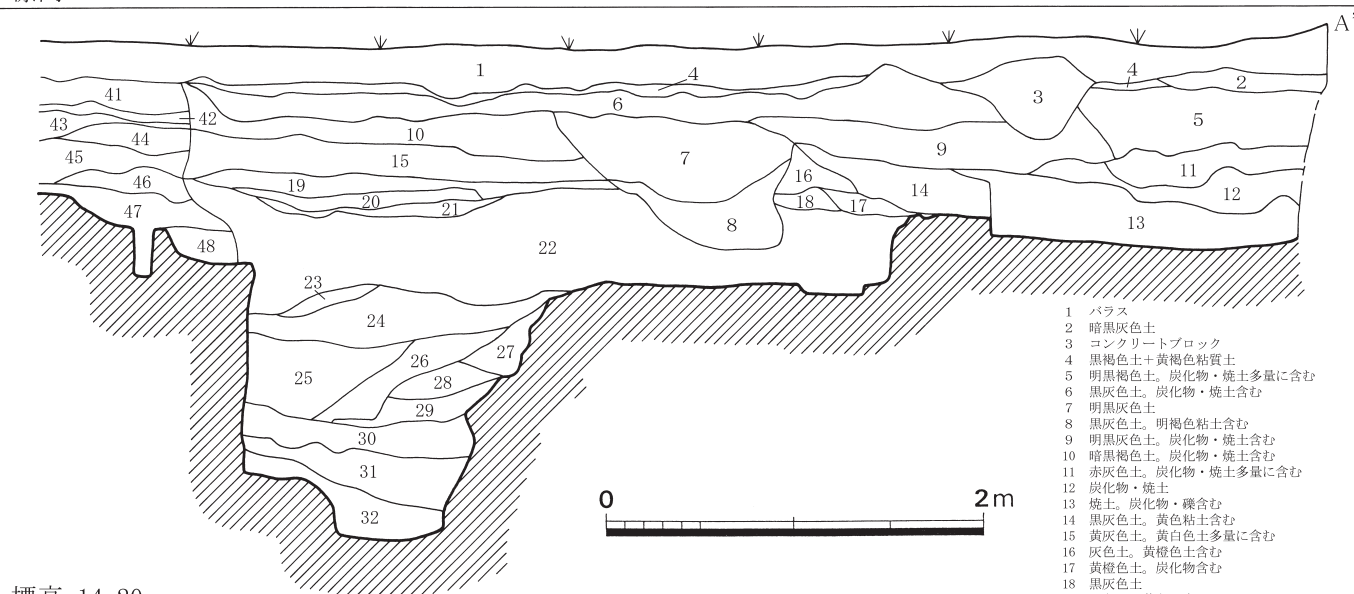
本調査地周辺の地形は、南から北へ向かって若干傾斜しており、城下町形成以降は宅地である。基本土層は、上層からバラスなどによる客土が約0.2m程度確認でき、その下層に粘質ブロック土や黒灰色土等による整地層が認められた。遺構検出面は削平・攪乱を受けているものの残存状況は良好で、検出面では多くの遺構を検出することができた。遺構検出面までの深さは、約0.8～1.0mである。以下、主要遺構の概要を述べる。

土坑

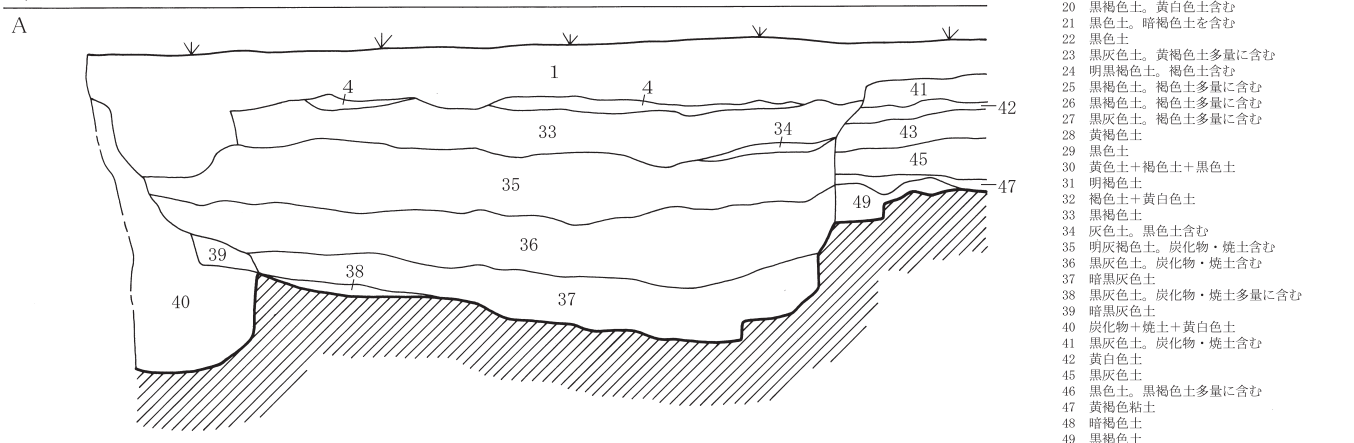
SK15（第7～9図）

調査区の中央部、西壁沿いで検出した土坑である。遺構の西部分は調査区外に広がるため、東西長や平面形等の詳細は不明である。検出した部分では、南北長約3.5m、東西長約1.7mで、深さは最深部で約1.7mを測る。調査区北壁から約2.1m付近で一端0.35m掘り込み、さらに1.7m南部分で約1.4m掘り込まれている。埋土は概して黒色土で、褐色や黄褐色のブロック土

標高 14.20m



標高 14.20m



第7図 調査区西壁土層断面図 (1/40)

を含んでいた。埋土からは、近世陶磁器や土師器・須恵器が少量出土している。

SK22

調査区東壁沿いで検出した。東部分は調査区外に広がるため規模などの詳細は不明である。南北長約1.2m、深さ約0.3mで、壁際の底部はすり鉢状を呈する。埋土からは土師器、近世陶磁器、瓦が少量出土している。

SK26 (第7・10図)

調査区の南西隅で検出した土坑である。一部を検出したのみであるため詳細は不明であるが、南北長約0.5m、東西長約0.5m程度を検出した。土層観察によると、深さは約1.0m以上



第8図 SK15全景 (東より)

であったものと思われる。後述するS X10に先行し、埋土には大量の焼土・炭化物が混入していた。さらに釘等の鉄製品も出土しているため、小鍛冶などの鉄製品生産に関わる遺構である可能性が考えられる。他には近世陶磁器や土師器などが出土している。

S K30 (第11図)

調査区の北東部壁沿いで検出した。後述するS K35に後出し、S E20に先行する。この遺構も一部を検出したのみであるため詳細は不明であるが、南北長約1.3m、東西長約1.2m分を検出している。深さは最深部で約0.5mを測る。埋土からは、近世陶磁器、砥石、瓦などが出土している。



第9図 S K15土層堆積状況（東より）



第10図 S K26全景（南より）



第11図 S K30全景（北より）

S K35

調査区の北東部分で検出した。前述したS K30や後述するS X5と重複し、いずれにも先行する。南北長約7.5m分を検出したが、遺構の大半は調査区外に広がるために詳細は不明である。深さは掘り下げ可能な部分で、約0.4mであった。埋土からは近世陶磁器、砥石、瓦などが出土している。

井戸

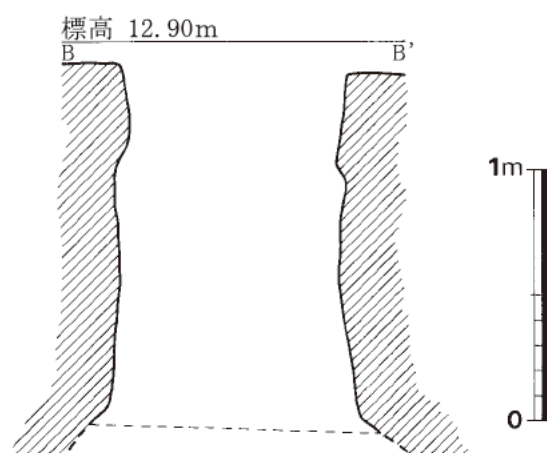
S E20 (第12・13図)

調査区北部で検出した。前述したS K30・35や



第12図 S E20全景（西から）

後述するS X 1に後出する。平面形は円形を呈し、上面の直径は約1.0mを測る。検出面から約1.0mまではほぼ垂直に掘下げられているが、直径は徐々に広がり、検出面から約1.3m付近まで掘下げたものの、安全性を重視し、掘下げを中止した。また、この部分でボーリングステッキを突き刺して確認したところ、さらに1m以上は深いものと思われる。埋土は黒灰色系の砂質土で、土師器、瓦質土器、近世陶磁器、鉄製品、瓦などが出土している。

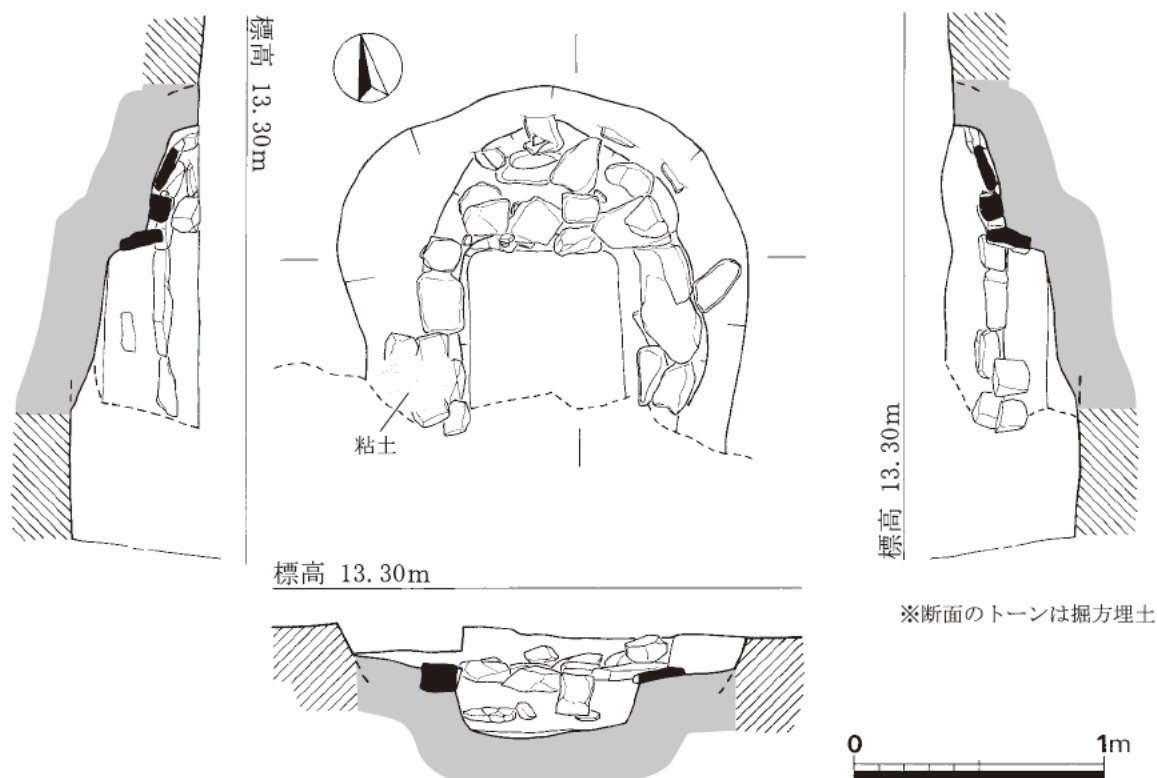


第13図 S E 20断面図 (1/30)

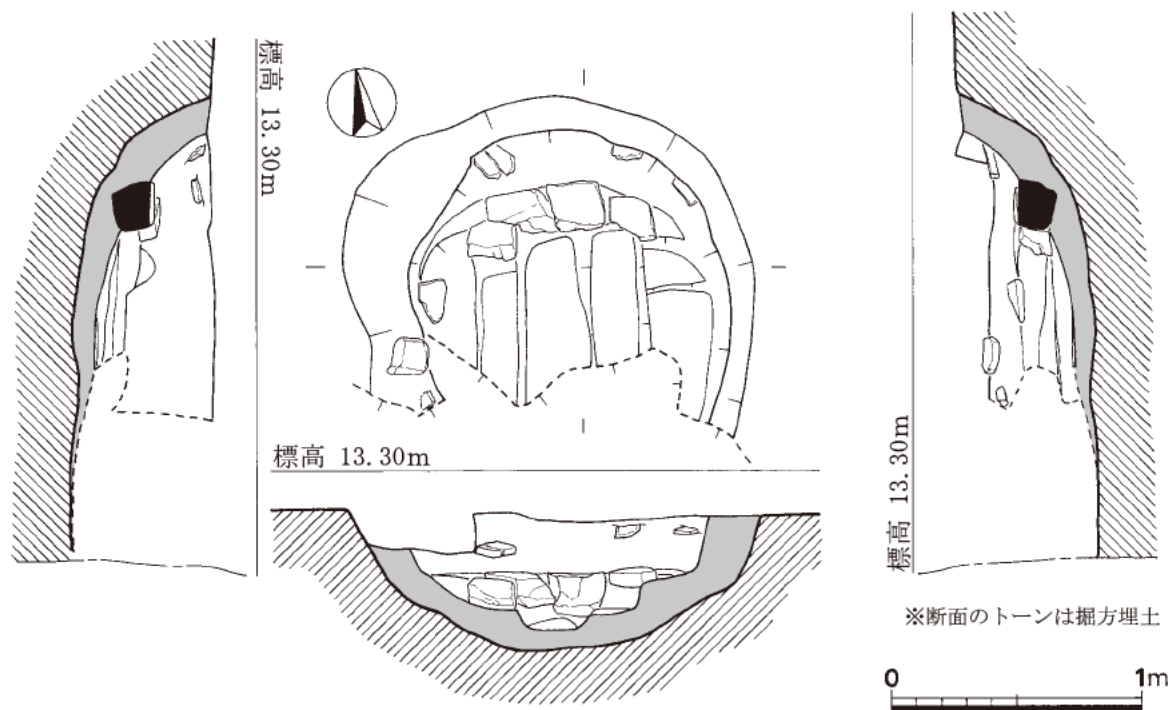
その他

S X 1 (第14～17図)

調査区の南部分で検出した。後述するS X 10と重複し、S X 1が先行する。検出した当初は上面に攪乱が重複しており遺構の詳細が不明であったが、攪乱を除去すると石組みのカマドであることが判明した。焚口部は西方であるが、S X 10に破壊され詳細は不明である。S X 1は、直径約1.6m、深さ約0.5mを掘り下げ、粘質土や砂質土、礫などで燃焼部を形成する。上面付近には板石状の礫を水平に配するが、奥壁部分には板石を立てている。燃焼部の底面は、検出面から約0.4mで、幅約0.6m、奥行きは約0.7m程度と思われる。S X 1は最低1度、作り変えられて



第14図 S X 1 実測図① (1/30)



第15図 SX 1 実測図② (1/30)



第16図 SX 1 全景① (西から)



第17図 SX 1 全景② (西から)

いると思われ、上面の石組みを除去して掘り下げると、奥壁付近に凝灰岩などで組まれた石組みが確認できた。さらにその前面両壁部において、石組みを除去したと見られる平坦面が確認でき、初期段階の焼成室は、幅約0.5m、奥行き約0.7m程度であったものと思われる。床面は赤色化や灰色化が著しく、床面付近には灰や焼土、炭化物が堆積しており、礫は赤色化していた。掘方からは近世陶磁器の細片が出土している。

SX 5 (第18～20図)

調査区の北部分で検出した。焼成に関わる遺構と考えられ、表土剥ぎの段階から大量の焼土が確認された。調査区東壁から西壁にかけて攪乱により破壊を受けているものの、底面には凝灰岩や花崗岩による石敷き面が検出された。調査区がトレンチ状であるため、SX 5の全体像は不明

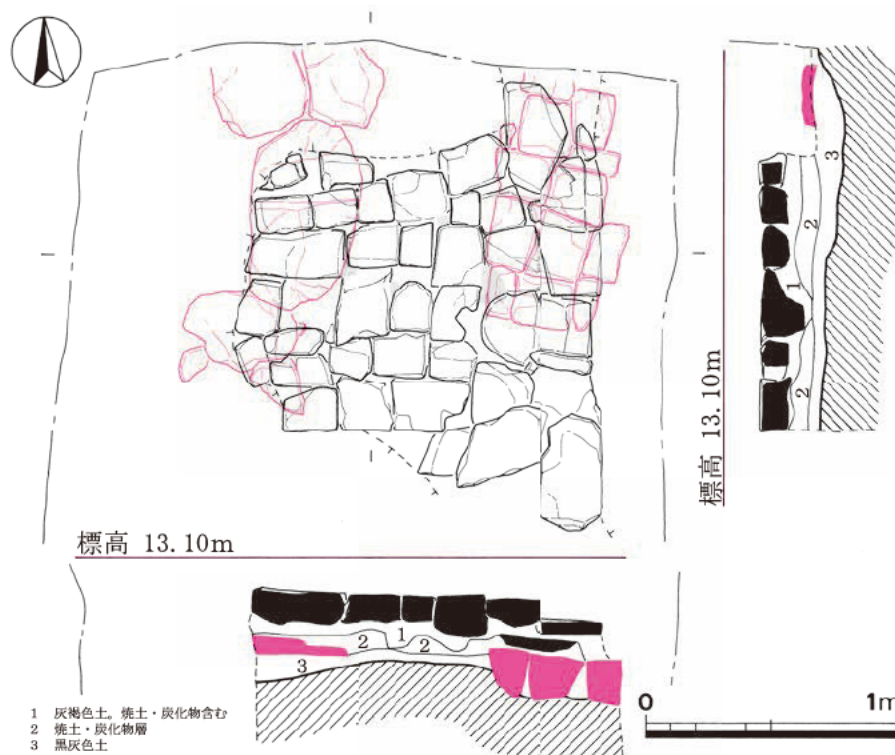


第18図 SX 5 全景①（北から）



第19図 SX 5 全景②（北から）

であるが、その大部分は調査区外に広がる可能性がある。検出できた石敷き面は、約 1.4m 四方で、厚さ約 0.05 ～ 0.15m 程度の花崗岩や凝灰岩などを用いて平坦面を形成している。石の隙間には粘質土により目張りが施されている部分もあり、石敷き面は焼土により覆われていた。この石敷き面を除去すると下面は焼土や炭化物を大量に含む灰褐色土が検出され、その下層には炭化物層や焼土



第20図 SX 5 実測図 (1/30)

層が確認できた。さらにその下層からは石敷き面がもう 1 面検出され、中央部は通路状の幅約 0.5m 部分に石敷きが施されていなかった。よって、石敷きの機能は不明であるものの、都合 2 面が存在するものと思われる。確実に SX 5 に伴うと思われる遺物は少ないものの、上面石敷き面の最上層より近世陶磁器細片、下面石敷き面の基礎土層より、近世磁器の細片が少量出土している。

SX 10（第 21 図）

調査区南西壁沿いで検出した。前述した SX 1 に後出する。一部を検出したのみで詳細は不明

であるが、南北約 3.6m、深さ約 0.6mを検出した。掘り下げた部分では、床面は平坦で、遺構の床面と壁は被熱により赤色化していた。出土遺物には近世陶磁器や土師器などと共に、羽口細片や釘等の鉄製品が多く含まれることから、鉄製品の生産に関わる遺構の可能性が考えられる。

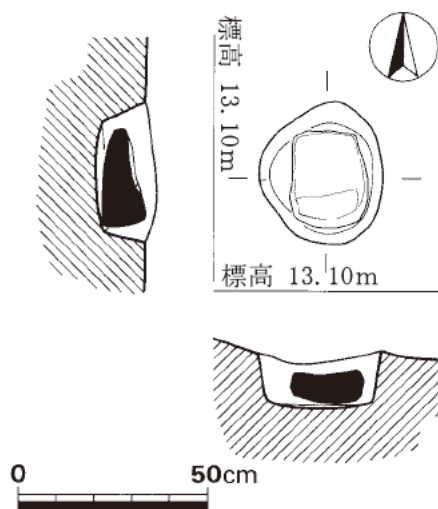
S X 28 (第 22 図)

調査区の南部分、前述した S X 1 の北側で検出した。南北幅約 1.5m、東西幅約 2.5m程度に広がるが、上面より多くの遺構が重複しており、元来の平面形は不明である。深さは約 0.2m程度であるが、床面には被熱した部分が確認でき、焼土塊が散在していた。黒色の埋土からは、古代の土師器が比較的多く出土しており、古代の遺構と考えられる。

ピット

S P 3 (第 23・24 図)

調査区の東壁沿いで検出した。平面形は楕円形を呈し、長軸長約 0.4m、短軸長約 0.3mを測る。深さは約 0.15mであるが、底面付近において片岩の板石を検出した。周囲には同様なピットを確認できなかったものの、調査区外などに広がる建物の基礎である可能性が考えられる。埋土からは、近世陶磁器の細片が 4 点出土している。



第23図 S P 3 実測図 (1/20)



第21図 S X 10 全景 (北から)



第22図 S X 28 全景 (西から)



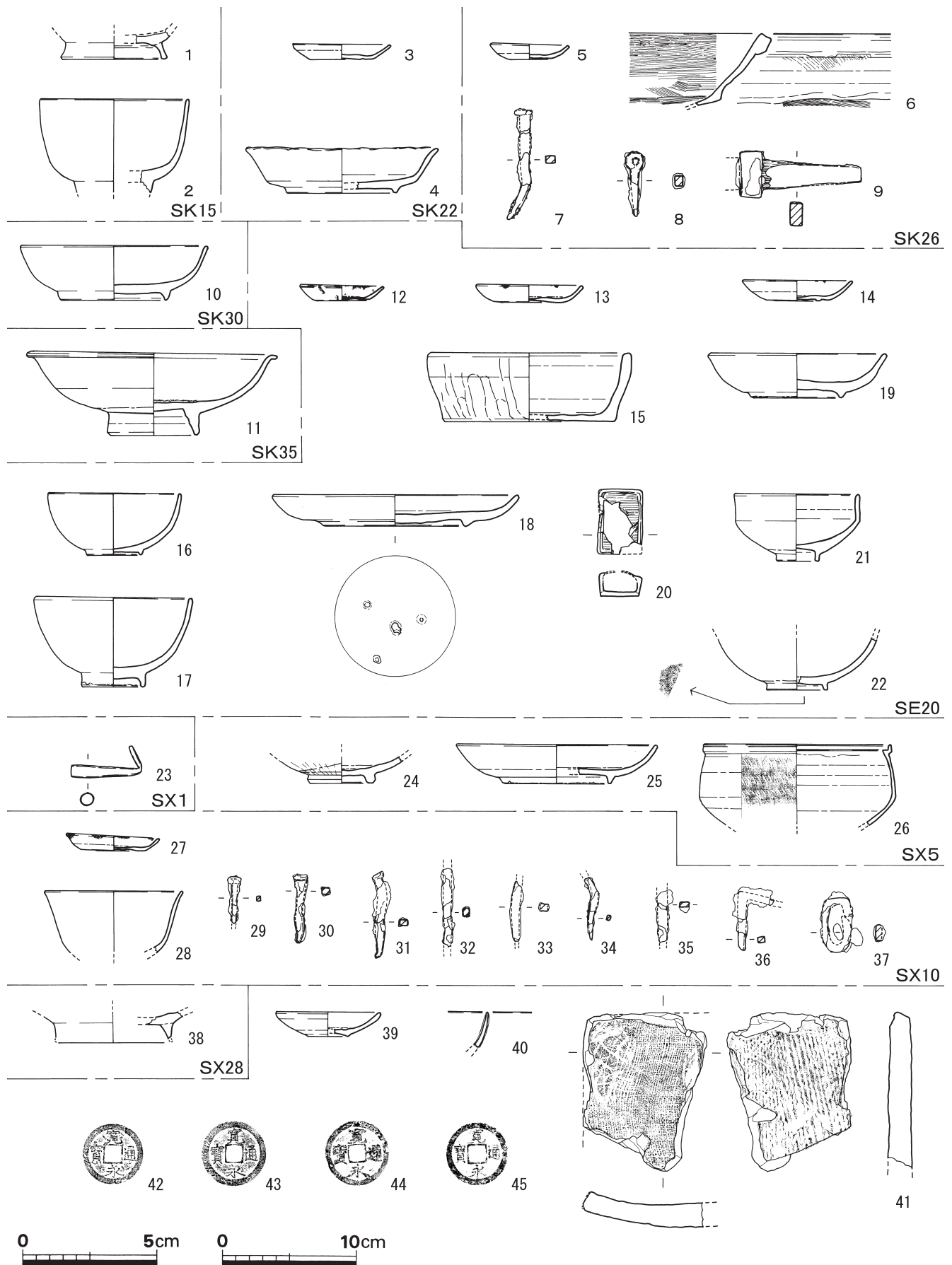
第24図 S P 3 全景 (西から)

3. 出土遺物

今回の調査区は約 30 m²と狭い面積であったが、土坑や焼成に関する遺構を多く検出することができた。各遺構から遺物が出土しているが、主に近世の所産である。また、S X28 やピットからは、概ね 8 世紀後半～9 世紀前半の遺物が出土している。全体の遺物出土量はパンコンテナーにして 1 箱である。種別は土師器、須恵器の他、瓦質土器、近世陶磁器、瓦、石製品、鉄製品、銅銭などがある。遺物についての詳細は、第 1・2 表を参照していただきたい。



第25図 出土遺物（写真①）



第26図 久留米城下町遺跡第23次調査出土遺物実測図 (1/2・1/4)

第1表 久留米城下町遺跡第23次調査出土遺物観察表①

遺物No.	出土遺構	種 別	器 形	法 量			色 調 (染付・釉薬)		調 整 (文様)		胎土・釉薬	備 考	遺物登録 番号
				口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	外 面	内 面			
1 第26図	SK15	土師器	埴	—	(8.0)	(2.0)	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	調整不明	ほぼ精良		201301 000022
2 第26図	SK15	磁器	碗	(11.2)	—	(7.0)	灰白	灰白	竹 園線	—	精良・白 染付		201301 000023
3 第26図	SK22	土師器	小皿	(7.4)	4.7	1.1~1.2	灰黄褐～ にぶい黄橙	灰黄褐～ にぶい黄橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ	ほぼ精良		201301 000038
4 第26図	SK22	磁器	輪花皿	(14.4)	(8.1)	3.4	明緑灰	明緑灰	宝 園線	宝・園線 東屋・山水	精良・白 染付	銘(内容不明)	201301 000039
5 第26図	SK26	土師器	小皿	5.9	3.0	1.1~1.3	精灰 褐灰 灰黄褐	暗灰 黄灰	回転ナデ 糸切り	回転ナデ	ほぼ精良	内外面に煤	201301 000040
6 第26図	SK26	土師器	土鍋	—	—	5.4	にぶい黄橙 ～灰黄褐 黒灰～黒	にぶい橙 暗灰～褐灰	ナデ 刷毛目 すり出し	刷毛目	ほぼ精良 多量の金雲母含む	内外面に黒斑	201301 000041
7 第26図	SK26	鉄製品	釘	8.2	0.7	0.6						重量11.8 g	201301 000045
8 第26図	SK26	鉄製品	不明	4.7	0.7	0.9						重量9.3 g	201301 000046
9 第26図	SK26	鉄製品	刀(柄)	(9.3)	金具3.4 柄1.7	0.9						重量60.5 g 柄部に木質残存	201301 000044
10 第26図	SK30	磁器	皿	(14.0)	(8.0)	4.1	明緑灰	明緑灰	唐草 園線	草花	精良・白 染付	「大明〇〇」の銘	201301 000048
11 第26図	SK35	陶器	鉢	18.7	7.0	6.0~6.3	灰褐～にぶい褐 灰黄褐 にぶい橙	灰褐～ にぶい橙 灰白・灰黄褐	釉垂れ	内刷毛目	ほぼ精良 灰釉	内面に砂目 蛇の目釉剥ぎ	201301 000049
12 第26図	SE20	土師器	小皿	6.3	4.2	1.1~1.2	にぶい黄橙 ～浅黄橙	にぶい黄橙 ～浅黄橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ	少量の輝石含む	灯明皿 内外面に油煙	201301 000025
13 第26図	SE20	土師器	小皿	(8.0)	(5.2)	1.3	灰白～ にぶい黄橙	灰白～ 浅黄橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ	ほぼ精良	灯明皿 口縁部一部に油煙	201301 000027
14 第26図	SE20	土師器	小皿	(8.2)	(4.5)	1.6	浅黄橙	浅黄橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ	輝石含む	灯明皿 口縁部一部に油煙	201301 000026
15 第26図	SE20	土師器	鉢	(15.3)	(13.0)	5.1	褐灰 にぶい黄橙	灰黄褐 ～黄灰	回転ナデ ナデ	回転ナデ ナデ	ほぼ精良	外面にケズリ痕	201301 000028
16 第26図	SE20	磁器	碗	9.9	4.2	4.6	灰白	灰白	菊花散らし 氷裂	菊花散らし 氷裂	ほぼ精良・灰白 染付	18C中～後	201301 000033
17 第26図	SE20	磁器	碗	(11.8)	4.8	6.6~6.7	灰白	灰白	唐 太閤石 園線 岩波?	園線 岩波?	精良・灰白 染付		201301 000032
18 第26図	SE20	磁器	皿	(18.4)	(10.8)	2.4	明緑灰	明緑灰	唐草 園線	花唐草・岩 松・恵輪・五弁花	ほぼ精良・灰白 染付	外面高台部に4ヶ所のハリ支え 「大明年製」の銘	201301 000035
19 第26図	SE20	磁器	皿	(13.3)	(6.9)	3.3	灰白	灰白	唐草 岩波	草花 園線	ほぼ精良・灰白 染付		201301 000034
20 第26図	SE20	磁器	水滴	(4.9)	(3.3)	(4.0)	灰白	白	線刻	布目	ほぼ精良・白 染付		201301 000036
21 第26図	SE20	陶器	埴	9.4	3.2	5.0	浅黄 灰オリブ 灰黄	浅黄	笹	—	精良・灰黄 灰釉	外面に鉄絵	201301 000037
22 第26図	SE20	陶器	埴	—	(4.6)	3.9	淡黄 灰白	淡黄	—	山水	精良・灰白 染付	内外面に貫入 「松吉カ」の銘	201301 000024
23 第26図	SX1	青銅製品	煙管	5.3	0.9	0.9						吸口部 重量6.9 g	201301 000002
24 第26図	SX5	陶器	碗	—	5.1	(2.0)	灰黄褐 灰白	灰黄褐 緑灰 灰白	—	—	ほぼ精良・灰白 灰釉	外面に放射状のケズリ痕 内面に釉剥ぎ 足込内に釉垂れ	201301 000006
25 第26図	SX5	磁器	皿	(15.0)	(8.1)	2.9	灰白	灰白	—	草花 園線	精良・灰白 染付	内面に釉剥ぎ・銘 外面高台部に砂目	201301 000005
26 第26図	SX5	陶器	行平鍋	(14.0)	—	(6.0)	灰赤 時赤褐 黒	にぶい黄 にぶい黄橙	飛鉋		精良・灰白・にぶい黄橙 鉄釉・灰釉	外面に煤	201301 000004
27 第26図	SX10	土師器	小皿	7.0	4.9	0.9~1.3	にぶい黄橙	にぶい黄橙	回転ナデ 糸切り	回転ナデ	ほぼ精良 3.5mm大の石英など	灯明皿 内外面に油煙	201301 000007
28 第26図	SX10	磁器	碗	(10.3)	—	(4.7)	灰白	灰白	宝	—	精良・灰白 染付		201301 000018
29 第26図	SX10	鉄製品	釘	(3.5)	(頭)1.0 (身)0.4	0.4						重量2.5 g	201301 000012
30 第26図	SX10	鉄製品	釘	5.1	0.6	0.5						重量5.7 g	201301 000010
31 第26図	SX10	鉄製品	釘	6.4	0.7	0.5						重量8.9 g	201301 000008
32 第26図	SX10	鉄製品	釘	(5.8)	0.6	0.7						重量6.1 g	201301 000009
33 第26図	SX10	鉄製品	釘	(4.4)	0.6	0.6						重量5.0 g	201301 000013
34 第26図	SX10	鉄製品	釘	(4.7)	0.4	0.4						重量2.8 g	201301 000011
35 第26図	SX10	鉄製品	釘	(3.7)	0.8	0.4						重量4.3 g	201301 000014
36 第26図	SX10	鉄製品	鉋	4.5	0.6	0.5						重量10.6 g	201301 000015
37 第26図	SX10	鉄製品	輪状製品	4.1	2.2	1.2						重量18.2 g	201301 000019
38 第26図	SX28	土師器	埴	—	—	(2.1)	にぶい橙	にぶい橙	回転ナデ	回転ナデ ナデ	少量の赤色粒子含む		201301 000047
39 第26図	SP11	土師器	小皿	(7.8)	(3.0)	1.8	褐灰～灰 灰黄褐	褐灰～灰 灰黄褐	回転ナデ 糸切り	回転ナデ	ほぼ精良	全体に煤状の付着物と黒斑	201301 000020
40 第26図	SP3	磁器	皿	—	—	(2.7)	明緑灰	明緑灰	唐草	不明	精良・灰白 染付		201301 000003
41 第26図	SP13	古瓦	平瓦	(11.8)	(9.2)	(1.8)	灰	—	タタキ(縄目)	布目	ほぼ精良		201301 000021
42 第26図	SK26	銭貨	寛永通宝	2.3	2.3	0.1						重量2.1 g	201301 000042
43 第26図	SK26	銭貨	寛永通宝	2.4	2.4	0.1						重量2.3 g	201301 000043
44 第26図	SE20	銭貨	寛永通宝	2.4	2.4	0.1						古寛永 重量2.6 g	201301 000031
45 第26図	SX1	銭貨	寛永通宝	2.4	2.3	0.1						重量2.5 g	201301 000001

Ⅲ. 調査の記録

第2表 久留米城下町遺跡第23次調査出土遺物観察表②

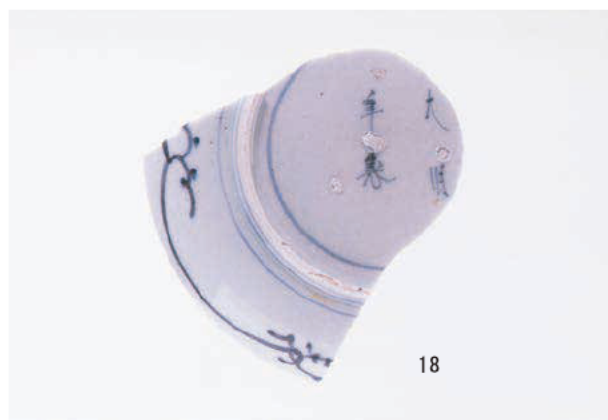
遺物No.	出土遺構	種 別	器 形	法 量			色 調 (染付・釉薬)		調 整 (文様)		胎土・釉薬	備 考	遺物登録 番号
				口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	外 面	内 面	外 面	内 面			
46 第28図	SE20	土製品	土鈴	5.2	(4.2)	(4.3)	にぶい橙	にぶい橙	ナデ	ナデ	精良		201301 000030
47 第28図	SE20	土製品	土鈴	6.2	4.7	5.0	にぶい黄橙 灰黄褐	にぶい黄橙 灰黄褐	ナデ	ナデ	精良		201301 000029
48 第28図	SX10	鉄製品	鉄滓									重量119.6g	201301 000016
49 第28図	SX10	土製品	羽口									重量42.6g	201301 000017

【遺物観察表凡例】

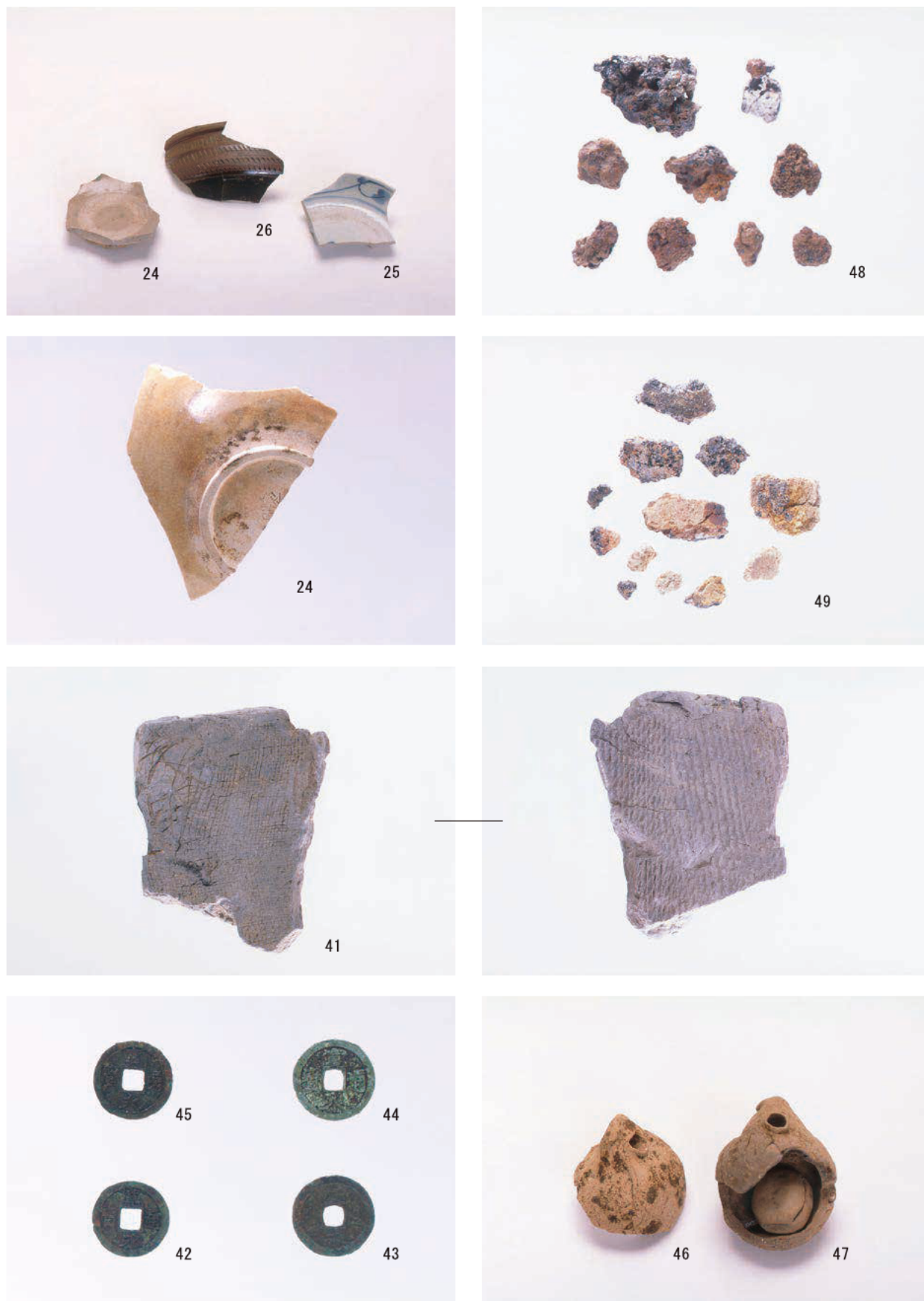
口径（長）・底径（幅）・器高（厚）の単位はcmである。（ ）内の数値は現存または復元値を示す。

色調は『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1997年版）による。

登録番号は、久留米市市民文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。



第27図 出土遺物（写真②）



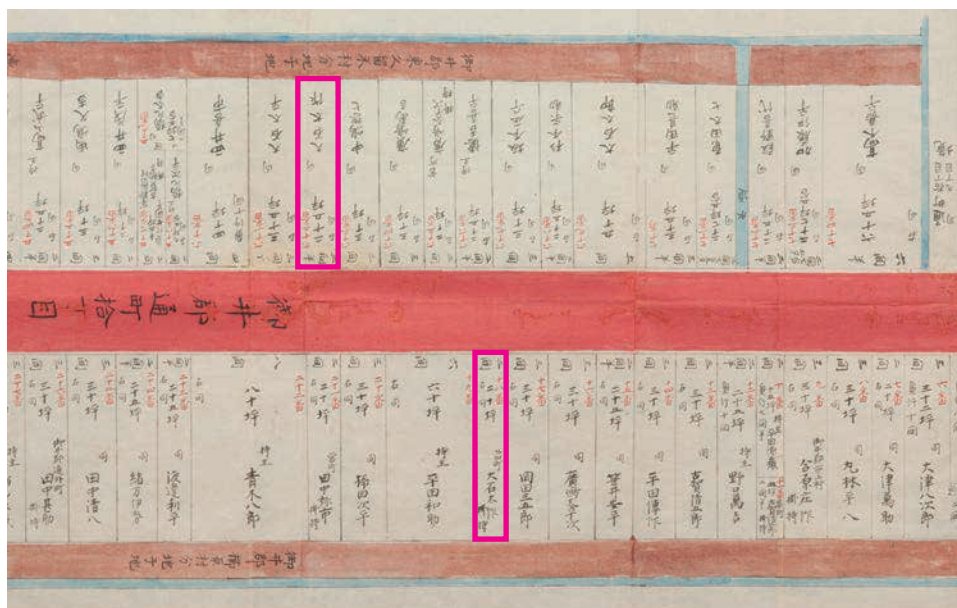
第28図 出土遺物（写真③）

IV. 総 括

今回は久留米城の南東部に整備された城下町、通町十丁目において調査を行った。この通町は、有馬豊氏が入国した当初は長町と呼ばれ、四丁ほどであったと言う。その後の有馬氏による城下町の整備に伴い、正保3（1646）年に十丁目まで延伸したものである。第23次調査は、通町を東西に通過する通町筋の北側における調査であったが、幅約2.5m程度のトレンチ状の調査であったため、遺構の詳細が不明であるなど十分な調査とは言えないが、ここでは得られた所見を述べておきたい。

今回の検出遺構の中で目を引くのは、焼成に関わる遺構が多い点である。S X 1はカマドと認識し調査を行ったが、検出面より下位で石組みを検出し、燃焼部と焚口部が地下に設けられた半地下式の形態を呈する。善導寺境内遺跡の釜屋における調査でも同様の遺構を検出しており、通常の町屋における使用よりも大規模であり、複数人数を想定しての利用が推測される。また、検出場所が通町筋に面しており、大規模なカマドを敷地の入り口付近に設けることから、通常の町屋の厨房としては不自然である。S X 5は凝灰岩や花崗岩の切石による石敷きを設け、焼土や炭化物に覆われることなどから、焼成室としての利用が想定される。S X 10は本文中でも述べたように、鍛冶に関わる可能性があるものの、遺構の大半が調査区外に広がるために断定できない。このように焼成に関わる遺構を多く検出したが、明治5（1872）年の「通町絵図」から調査地を推定した結果（図中には間口幅が記録されており、この数値が正確なものであることを前提として計測。田中久重生家など場所が特定している個所と照合しても概ね正確である）、第29図の中央下に見える「大石太作」の敷地にあたるものと思われる。枠内には「當町」「掛持」の記述があるが、通りを挟んだ左上に「大石太作」の名が見える。間口と敷地面積などからこちらが住まいと考えられる。一方、鶴久家資料に明治の所産と考えられている大石太作の「領収證」が伝わっ

ている。内容は、「有馬様（有馬元長か？）へ裸麦や麦麴を納め、支払いが完了した旨の内容であるが、このことから大石太作が穀物や麦麴を取り扱う商人であることが窺える。また、味噌や醤油を製造する際に必要な麦麴を取り扱ってい



第29図 通町絵図（十丁目付近 部分）

ることから、S X 5は麴室である可能性がある。S X 1が通筋に面していること、住まいが別に設けられていることなどから、調査地は作業場としての利用が想定されよう。S X 1は出土遺物が少なく時期は判然としないが、S X 5からは行平鍋が出土しており、幕末頃まで使用されていたものと思われる。

今回の調査は極めて限定的なものであったが、検出遺構と残された絵図、文書の記載事項が一致する貴重な成果を得ることが出来たと考える。

※「通町絵図」や大石太作「領収證」については、当課の穴井綾香、古賀瑞枝の教示・協力を得た。

報 告 書 抄 録

ふ り が な	くるめじょうかまちいせき だい23じはつくつちょうさほうこく						
書 名	久留米城下町遺跡 ー第23次発掘調査報告ー						
シ リ ー ズ 名	久留米市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第339集						
編 著 者 名	神保公久(編)・米澤美詠子						
編 集 機 関	久留米市 市民文化部 文化財保護課						
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15番地3 Tel 0942-30-9225 Fax 0942-30-9715 Email : bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp						
発 行 年 月 日	2013(平成25)年12月27日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地		コード		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	発掘期間	発掘面積	発掘原因
			市町村	遺跡番号					
くるめじょうかまちいせき 久留米城下町遺跡 第23次調査	くるめし 久留米市 とおりちょう 通 町350-2外		40203	—	33° 18' 58"	130° 31' 22"	20130403 } 20130424	30 m ²	記録保存調査

所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項
久留米城下町遺跡 第23次調査	集落	奈良 ～平安	ピット		土師器・須恵器		久留米城下町遺跡の東端、 通町十丁目における調査。 半地下式のカマドや焼成に 関わる石敷き遺構を検出し た。
		近世 ～現代	土坑	5基	土師器、瓦質土器、近		
			井戸	1基	世陶磁器、瓦、石製品、		
			カマド	1基	鉄製品、ガラス製品		
			焼成遺構	2基			

要 約			
久留米城下に整備された久留米城下町遺跡の東端にあたる通町十丁目において調査を行った。30㎡という狭い調査区ではあるが、多くの遺構を検出した。中でも、半地下式のカマド1基をはじめ、焼成に関わる遺構を多く検出している。S X 5は石敷きの遺構で、新旧2面が確認できたが、焼土や炭化物が集中している。対象地は、明治5(1872)年の通町絵図と対比すると「大石太作」の居住地にあたる。大石太作に関する資料は、有馬家に裸麦や麦麴を治めた領収書が残されており、S X 5は麦麴に関する麴室ではないかと考えられる。			

土木工事の届出日	平成25年 3 月22日	遺物の発見通知日	平成25年 4 月25日 (25文財第133号)
----------	--------------	----------	-----------------------------

久留米城下町遺跡

—第23次発掘調査報告—

久留米市文化財調査報告書 第339集

平成25年12月27日

発行 久留米市教育委員会
編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課
印刷 永松印刷
久留米市中央町20-22